

テレビ会議システムを使用した異文化間プレゼンテーション能力の向上のための指導

—オーストラリアの高校生とのテレビ会議授業を通して— **共同研究**

代表者：北海道／北海道千歳高等学校 教諭 山崎 秀樹

概要

本研究は、異文化間プレゼンテーションの経験がない生徒が、オーストラリアの高校生とのテレビ会議システムを通じて、英語による異文化間プレゼンテーション能力を、どのように、どれくらい向上させるのか、また、英語による双方向の即時的なコミュニケーションが、英語プレゼンテーションへの心理的障壁を取り除くことができるのかを検証した。その結果、①プレゼンテーションとそれに向けての準備が、英語力（特に話すこと・書くこと）を向上させること、②異文化にいる相手にも伝わるよう、プレゼンテーションの構成やデリバリーの工夫をすること、③異文化間コミュニケーションの差異に気づくこと、④同世代の生徒を相手に双方向かつ即時的なコミュニケーションを通して、英語を使うことへの自信が向上すること、⑤以降のプレゼンテーションスキルの向上や英語学習への動機づけが強化されることがわかった。

だ。一方、大学等高等教育機関ではすでに1990年後半から2000年にかけて研究が進み、その後高等専門学校などに広がり、さらに SELHi や SGH などの指定を受けた高校や ICT 教育研究指定校に導入が進んだ。また、その後の技術革新により、当時よりも伝送速度が向上し、よりクリアな画像や音声でのテレビ会議による英語の授業が可能になった。

北海道千歳高等学校のテレビ会議システムは、2013年度に導入され、国際教養科の1～3年生がそれぞれ年間約10回ほどの交流を行っている。本校のテレビ会議による授業交流は、University of New England, NSW の Auh and Walker (2013) による AsiaConexion プログラムと連携している。これは、ニューサウスウェールズ (NSW) 州内の中等教育機関のうち、日本語教育を行っている学校の生徒を相手に、英語と日本語で言語や文化交流を行うものである。これにより、本校生徒は簡単な日本語を使用して相手の日本語学習を補助したり、オーストラリアの文化について知ったり、英語で相手に日本について伝えたりする機会を得ることが可能になる。

また、オーストラリア政府の教育政策や IT 技術の推進もこのプログラムの追い風になっている。Henry, et al. (2012) による Australia in the Asian Century White Paper によれば、言語や異文化理解教育と、IT 技術を使った学校間のやり取りの研究や実践と統合して行うことを、将来の貿易および経済発展のための方策としてとらえている。また、インドネシア語、日本語、中国語、ヒンディ語を「アジアの世紀 (Asian Century)」における重要外国語と位置づけ、学校教育で重点的に教育されるべき言語としている。さらに、ブロードバンドネットワークの整備、

1

はじめに

1.1 背景

文部科学省 (2014) の報告によれば、IT 技術や伝送技術の発展と ICT を用いた教育の推進がなされ、高校の英語教育の現場にも ICT 機材の導入と活用がますます進みつつある。特に、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) やスーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定による ICT 機材の導入に伴い、テレビ会議システム (tele/video-conference system) の導入も進ん

National Broadband Network (NBN) に430億豪ドル、教育のデジタル革命、(Digital Education Revolution) に210億豪ドルの投資がなされたことに後押しされている。

本校のテレビ会議システムと University of New England, NSW のプログラムを用いた英語授業は、① 学んだ英語を実際に使って相手とやり取りできるオーセンティック（限りなく現実に近い）な言語体験、② 文化理解の促進の機会、③ 生徒が教員やALT（外国語指導助手）以外の同年代の相手生徒とのやり取りできる機会、④ 自分や身の回りのことを発信する機会から得られる自国文化や生活についての気づき、⑥ 以後の動機づけのための成功・失敗体験と次の活動への改善と、⑦ 生徒が主体的に進める国際協同作業の導入、を目的としている。

1.2 研究の目的・仮説

テレビ会議システムが提供する、即時的かつ双方向的で、表情や動きとともに音声を取り取りするオーセンティックな言語使用環境と協同学習が、① 生徒の学習意欲、英語4技能の向上にどう影響するか、とりわけ、② まとまった内容について、異文化を持つ相手にもよく伝わるプレゼンテーションをどのように作成、工夫、改善していくか、③ このシステムを使用する学習者の心理面、動機づけにどう影響するか、について検証する。

それまで異文化を持つ相手に対して英語でプレゼンテーションや議論をした経験がほとんどない、入学したての高校1年生の生徒が、テレビ会議を通して、ビジュアルエイド（自作の視覚補助教材）を使用しながら、自国文化について英語でプレゼンテーションを行う。それまでは、何かを伝える経験と言えば、ペーパーテストのライティング、生徒同士のペアワークやグループワーク、限られた回数の国際交流行事などであった。しかし、通年で授業内で行われるテレビ会議システムでは、発音や英語に多少難があるにせよ、自分の英語を工夫し、異文化を持つ相手を意識して、何とか伝わるようにプレゼンテーションを行わなければならない。その過程で、異文化間コミュニケーションへの気づきのポイントが増えるとともに、相手が理解できるように英語で話す・聞く・書く力と伝える技術は向上していくのではないかと。また、定期的なテレビ会議を通して、相手を理解するにつれ、異文化を持つ相手にプレゼ

ンテーションを行う心理的障壁や恐れ、苦手意識は軽減していくのではないかと。以上を仮説として検証する。

2 先行研究と本実践研究への応用

2.1 大学での先行研究

最先端の技術と機材を用いたテレビ会議システムによる外国語教育の研究は、2000年前後から、主に大学などの研究機関にて行われていた。高橋（1999）は英語指導におけるテレビ会議システムの利用の効果を、言語能力とコミュニケーション能力や非言語能力など6つの能力を伸ばすものとして理論の面から研究している。また、西堀（2002）は、北海道大学とスタンフォード大学との間で遠隔協調学習を行い、「異文化の中に存在する学習者を、同時に多数結びつける教授法」について考察し、インターネット上でつながる学習者全員が「分散知」となってコミュニケーションを形成していると考えた。さらに、川口（2005）は国境を越えたコミュニケーションを可能にするテレビ会議の「タスク設定」の意義について研究している。本研究実践では、この「分散知」の概念を用い、離れた場所の生徒同士が持っている知識をテレビ会議を通して共有できる機会に応用し、「タスク設定」の中心に、自国文化に関するリサーチに基づく英語プレゼンテーション活動を置いた。

2.2 高等専門学校等での研究・実践事例

本実践研究は、高専の実践研究から得られたポイントを多く取り入れた。高等研究機関であり、同時に高校3年間に加え、大学の2年に当たる年齢層の学生への教育機関でもある高等専門学校では、大学の専門研究、専門教育と語学教育を兼ね合わせた研究実践が多くあり、高等学校現場の実践に発展学習として応用できる実践が多くなされている。成瀬・長山（2006）はオーストラリアとのテレビ会議システムを用いた「国際交流学習」の実践を行ったが、テレビ会議のみならず、メールや郵便などのやり取り、実際の訪問など、複数の交流方法を用い、テレビ会議の授業内活用と発展と課題を示した。清水・宮地（2009）および、清水（2010, 2015）は、高専における英語教育にテレビ会議システムを導入

し、アメリカの大学生を相手に、日本文化紹介やアメリカ文化に関する議論を通して、学生に「ホンモノ」に触れさせ、「英語を話す必然性」を作り実践した。1対1の個別のやり取りを可能にする仕組みを作ることに、テレビ会議による会話から発展させ、議論、プレゼンテーション、レポート作成など、ブレンデッドラーニング（オンライン学習と対面学習を組み合わせる）へ近づけるアプローチを検証した。「国際競争力のある」学生の育成を目標に、個々のスキルを向上させる環境や体制を整備したのは、高等教育機関から中等教育へのテレビ会議の活用と研究という点で意義深く、本研究にも応用した。

2.3 国際理解教育と異文化理解

小学校でテレビ会議を通じて国際共同学習を実践した結果を、大学生のそれに応用した研究を行った清水（2011）や、小学校における異文化理解学習を行った坂本（2013）、永田（2011）の研究は、初等教育機関における、早期の国際交流、異文化間コミュニケーションや情報リテラシー教育、協同学習の素地作りという点で意義深く、高等学校においてもその要素と課題は共有できる。また、異文化理解力の向上の観点からのテレビ会議の活用では、テレビ会議を通じた国際理解教育を実践し、国際感覚と動機づけの研究を行った、與儀（2009）の研究や、テレビ会議で扱う重要なコンテンツとしての「自国文化の涵養」の重要性を指摘した、中畠（2006）の実践研究を本研究実践に応用した。さらに、影戸・渡辺（2003）、影戸（2007）が実践研究した、「学習者の発信を支えるメディア」としての英語プレゼンテーション活動において、国際交流モデルとメディア使用における課題として挙げた「異文化理解への力」、ITリテラシーと、情報機器の使用などの「国際交流に必要とされる力」、「英語への意識差」を本研究に反映させた。

2.4 学習意欲、心理的效果とプレゼンテーション能力

廣瀬（2006）は、カナダの大学と日本の大学生とのテレビ会議を通じた遠隔講義が、学習意欲を高める効果と学習者に及ぼす心理的なインパクトについて研究した。テレビ会議が持つインパクトや動機づけはさまざまな研究で指摘されているが、単発的なイベント的ではなく持続的に授業内に取り入れてい

く仕組み作りが課題となる。本実践研究では、「異文化理解」の授業で学んだ内容を発展させたり、関連づけたりしながら、継続的な授業実践としての効果を考察した。

テレビ会議における英語プレゼンテーションの観点では、英語が外国語である生徒が実践する際に、正しく伝わるプレゼンテーションを作る要素は何か注目した。仮につたない英語であったとしても、音声面の弱さをカバーするビジュアルエイドや、デリバリー（発表の仕方）やノンバーバル的要素などを工夫することにより、より伝わりやすいプレゼンテーションを行うことが可能であることを生徒に体験的に気づいてもらうため、奥崎（2010）、奥崎・森谷・小山・工藤・木村（2011）の研究を応用した。同研究では、英語プレゼンテーションにおいて、「発音に難があっても総合評価が上がる要素」は、デリバリーの技術や工夫など、4つの要素で補完することであるとした。また、日本語から英語へ思考を移行しながらプレゼンテーションを準備する過程について、影戸（2007）は、「人前でインタラクションをとりながら発表する、話す力は伝統的な日本語教育の中では新しい分野」であると指摘し、プレゼンテーションの「構成」「ファイルの作成」「話す力」を必要な構成要素とした。本実践研究では、これらの先行研究に注目して、英語プレゼンテーションを指導をすることにした。

3

導入と研究方法

3.1 導入の経緯

本実践研究におけるテレビ会議システムの導入の発端は、極力多くの生徒が日常的に英語話者とより効果的に英語が使える環境を作るのに最も効果的であろうと考えたことにある。過去にSELHiの指定を受けた千葉県立長生高等学校を視察し、同校のテレビ会議が、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州にあるUniversity of New EnglandのDr. Auhを中心としたAsiaConexionプログラムとかがわって行われていることを知り、本校でCisco社のテレビ会議システムをリースし、このプログラムに参加した。2013年2月に導入して以来、のべ160名もの生徒が年間約10回程度このテレビ会議システムを活用し、オーストラリアの生徒と交流を深めている。

相手校は日本語の授業を行っていることが多く、両校生徒は、英語と日本語とその文化を教え合う経験、日本語や英語を聞いたり使う、オーセンティックな経験が可能になる。

3.2 使用機材について

本校のLL教室にて、40インチの大型液晶テレビに、Cisco社のテレビ会議システム器材と、教室全体に届く可動式のカメラがセットになった装置に、光ケーブルをつないだルーターからインターネットに接続する装置となっている。各機材はNTTファイナンス社とリース契約を結んで使用している。このデバイスにコンピュータやプロジェクターなどを接続し、大画面で相手の様子が見えるようにしたり、コンピュータの画面を相手に見せたりすることもできる。

3.3 導入上の工夫

オーストラリアの生徒が相手であるメリットは、同国の国策としてのICT教育の推進やブロードバンドの整備などの後押しもあるが、何よりも日本との時差が少ないことであり、それがオーストラリアとのテレビ会議の導入を比較的容易にさせている。オーストラリアのシドニーとは、1時間の時差があり、夏時間の時期には2時間となる。本校の1校時目の開始が8:45のとき、相手は9:45、こちらの5校時目開始が13:20のとき、相手は14:20であるため、北米やヨーロッパなど時差が大きい地域とのテレビ会議と異なり、時間割上の制約が少なく、授業時間内に無理なくテレビ会議が可能となる。また、両校の教員同士の打ち合わせも大きな時差がなく、勤務時間内で行うことも可能となり、スムーズな協力体制作りが可能となる。

本校の生徒には、動機づけとして、1) この機材は多くの学校に導入されているわけではない特別なものであること、2) 本校国際教養科のみのために導入されたものであること、3) 専門科目や通常科目で学ぶ英語（インプット中心）を実際に使ってみる日常的な機会になること、4) 英語を学ぶだけでなく、相手の文化や同世代の高校生の考えを知ることができること、5) 相手は本校生徒と同じく、外国語として日本語を学んでいるので、相手生徒も同様にこのような機会を心待ちにしていること、6) 自分の中に当たり前にある日本語や日本文化・習慣を改めて見つめ、それを相手に伝える経験は、自分

とその文化を知るという上で国際人には必要なこと、7) 最終的には生徒自身で接続したり、40分間のテレビ会議を自分たちで構成してリードしてもらいたいこと（信頼と自治）、8) この取り組みを全国に発信できるものにすること、を伝えた。将来的に年間15～20回を目標に、定期的に導入することで、日常の学習の目的にすることと、生徒がテレビ会議を楽しみにするように、徐々にテレビ会議への参加を促し、抵抗感を減らすこと、同世代との会話のやり取りをメインにすることを目的とした。また、最終的にはこの機材の自由な利用や、テレビ会議の40分を生徒が中心となって進めるようにするなど、生徒への信頼と自治権の委譲を目標とすることで、生徒が自主的に、内容を工夫しながら、テレビ会議を活用していくように促した。このように、動機づけと自治権の委譲は、異文化間コミュニケーションの心理的障壁を取り除き、自律した学習者として学ぶことや、テレビ会議の主體的なプレーヤーへと成長させるための重要な要素だと考えられる。

3.4 運営と相手校との連携

このテレビ会議システムを用いたオーストラリアの高校との交流とプレゼンテーションを、本校国際教養科1年生から3年生まで（各1クラス40名）すべてのクラスで行っている。1年生、2年生は「異文化理解」の授業で、3年生は「時事英語」の授業で導入しており、年間10回～15回の計画で行っている。オーストラリアの新学期は2月、日本は4月と、スタートの期間に若干の差があるため、先方の始まりに合わせることは難しい上、こちらも4月の新学期から落ち着いてテレビ会議がスタートするのは5月となる。オーストラリア、University of New EnglandのDr. Auhがコーディネーターとなり、相手校とのマッチングや年間計画の策定、指導内容、交流内容の助言などを行っており、それを踏まえて本校のクラスと相手校のクラスのテレビ会議がスタートする。

相手校の教員は、日本語を教えているオーストラリア人教師や、現地の日本人の日本語教員である。年間計画・シラバスの作成、日本語の指導内容、文化面の紹介やプレゼンテーションのテーマ、生徒の名簿、ミーティングの日時決定など、日常のやり取りは、メールで行い、ある程度計画ができたところでテレビ会議で教員同士が互いに顔を見ながら内容を議論したり、精査できるのもこのテレビ会議シス

テムの特長である。

3.5 「異文化理解」の授業内での活用と実践

北海道千歳高等学校国際教養科1年生40名の「異文化理解」(週3時間:年間100時間)において、2週間に1回のペースで、長期休業中や行事などは除いて実施した。本校国際教養科は、英語科・国際科に類する外国語や文化を学ぶ専門学科であり、1年次は「総合英語(4単位)」「英語表現(2単位)」そして「異文化理解(3単位)」が必修となっている。この「異文化理解」は、日本人教諭とALTとのチームティーチングで行われている。さまざまな文化について英語で読み、意見を書き、英語で議論したり、ニュースやビデオ教材を聞くなど、英語の4技能の向上を目的とした展開となっている。「総合英語」や「英語表現」で学んだ英語を応用し、それらで扱う内容もより深化したものになっており、特に表現や発信、プレゼンテーションを扱うという点で、本学科の専門科目として特徴的なものとなっている。

この授業において、およそ9か月間、オーストラリア・ニューサウスウェールズ(NSW) グレインネス(Glen-Ines)高校の日本語クラス生徒と15回のテレビ会議システムを用いた、英語による相互のプレゼンテーションの発表・意見交換を行った。テレビ会議がない通常の授業時は、Broukal(2011)による、世界の文化に関する英語テキスト *What a World* を講読し、世界の有名人、先住民族、文化風習に関する内容の英文を読み、議論しながら、テレビ会議向けにそのトピックの内容に相応する日本文化やオーストラリアに関する文化学習と、その内容に関するプレゼンテーションの準備を行った。例えば、北欧の先住民族サーミについてのテキストの内容をペアワークやグループ学習、議論で理解を深めた後、日本のアイヌ民族の衣食住や信仰、歴史的経緯、地理や政治に関することなど8トピックを分担してリサーチし、スライドにまとめた。テレビ会議を通してプレゼンテーションを行い、相手にはオーストラリアの先住民であるアボリジニについて発表してもらい、意見交換や議論をした。このように、プレゼンテーションを機軸とした、双方向の即時的なやり取りによるアクティブな学びと協同学習が可能になった。

3.6 トピックとプレゼンテーションからの気づき

テレビ会議では、本校生徒が行う年間のプレゼンテーションのテーマを、「日本の偉人・有名人」「日本・世界の先住民文化」「学校生活紹介」の3つに設定し、対象生徒40名それぞれに1つずつ、そのサブトピックを課題テーマとして与えた。例えば、海外で紹介すべき「日本の有名人」では、生徒が扱いやすいミュージシャン、スポーツ選手やノーベル賞受賞者、歴史上海外とかかわりのある人物についてプレゼンテーションをさせた。生徒は相手に興味を持ってもらえそうな内容をリサーチし、構成を考えて英語でスクリプトを作成した。口頭説明の際、生徒の英語の不足を補うビジュアルエイドを作成し、よりわかりやすい説明を心がけた。ビジュアルエイドは、画用紙で写真や似顔絵、数字などのデータ、内容で重要な情報を文字で見せる工夫を行った。

「映画俳優・監督」のトピックでは、宮崎駿や渡辺謙についてプレゼンテーションを行った生徒もいた。オーストラリアの生徒も同じアニメや映画が好きなことがわかるなど、相手の感心と反応を感じ、生徒の発表内容が相手に伝わり、理解されたと感じられる場面も多くあった。

「日本の学校生活」については、普段意識しないことを再確認するという点で、中畠(2006)の指摘する「自国文化の涵養」の再認識と必要性を感じた。本校生徒にはごく普通の学校生活であるが、登校の手段、ホームルーム、昼食や弁当、清掃、放課後の活動や進路への関心など、生徒が自分自身について再認識でき、その発表にオーストラリアの生徒は大きな関心を示した。例えば、本校の生徒が当然と考えている放課後の掃除が、相手にとっては驚きだという事実で驚き、オーストラリアの生徒は、日本人が持つ公共心や自分の役割への責任が学校で形成されることを理解したようだ。

3.7 評価

本実践の生徒の活動の効果の測定・評価の手段として、次の4つの方法を用いた。

- ① 生徒のプレゼンテーション自体の評価は観点別に、教員・ALTと生徒同士がRUBRIC評価を行った。
- ② 生徒の作成物をファイルにまとめ、生徒が作成した英語のスクリプトの下書きや清書など、内

容に関する記述の量や質の変化がわかるよう、ポートフォリオを作成・提出させ、その質と量の評価を行った。

- ③ テレビ会議の事前・中間・事後の生徒の情意面の変化を調査するアンケートを計3回実施し、考察した。
- ④ アンケートで、生徒が書いたり話した英語の再現や、実践後の感想などを自由記述させて分析した。

3.7.1 RUBRIC 評価

生徒のプレゼンテーション評価は、生徒による相互評価と教員・ALT による RUBRIC 評価で行った。英語の発音、プレゼンテーションの構成、デリバリー、内容などを観点別に評価を行い、各項目3点満点～5点満点、合計25点満点で評価し、感想や改善点を書いてもらい、発表者にフィードバックとして返した。これにより、生徒は自分の弱点や不足しているポイントを理解し、不足を補うことで次回以降のプレゼンテーションの改善に生かすことができた。また、評価基準を RUBRIC であらかじめ提示しておくことで、評価で高得点を取るためにはどう工夫をすればよいかを考えさせ、以後のプレゼンテーションの準備に反映させることができるようにし、生徒の「気づき」を期待した。

3.7.2 ポートフォリオ評価

生徒それぞれにクリアポケットホルダーを持たせ、自分のテーマについてリサーチした際の資料やメモ、プレゼンテーションの完成版スクリプトと添削を受けたもの、書き直したものの、発表のビジュアルエイドとして作成したポスターやスライドなどを収納させ、記録させた。これにより、生徒が、作成した順に資料を整理して記録し、視覚的に学習量、改善結果や準備の過程を振り返ることができる。また、教員による生徒の発表の準備段階での評価、作成過程の評価の十分な根拠にもなる。さらに、生徒自身が「これだけできた・やってきた」という達成感や充実感を感じることができる効果もある。

3.7.3 アンケートによる評価と効果の検証

生徒にはテレビ会議の利用前アンケート（5月）と中間アンケート（10月）、利用後アンケート（2月）を行い、利用前には、テレビ会議に期待することやオーストラリアについての事前の理解や興味関心、

中間アンケートでは改善点や成果の意識変化と振り返り、利用後には、楽しいと感じた理由、英語力向上の実感や自信などについてアンケートを行った。アンケート内において、身につけた英語のフレーズなどを再現させ、感想を日本語で自由記述させたものを回収した。これにより、異文化を持つ相手・聞き手によく伝わるプレゼンテーションを行うのに生徒がどのような工夫をしたのかがわかるようにした。また、異文化を持つ相手に英語でまとめた内容を説明することへの抵抗感の減少、自信の増加、改善への気づき、ゆとりや達成感などの心理的变化がわかるような設問をつくり、選択式・記述式で回答させた。

3.7.4 使用英語の再現・感想の自由解答欄

事後アンケートの中で、テレビ会議上で使用した英語表現などを再現させた。これにより、自分がプレゼンテーションで使用したフレーズや、表現、語彙などの再現が可能かどうかなど、語彙やフレーズの定着を評価できるようにした。また、事後アンケートに自由解答欄を設け、4月の入学時点と比較したプレゼンテーション力の変化、テレビ会議に関する感想、今後のプレゼンテーションへの目標、実感できたテレビ会議システムの効能、今後の課題や目標、改善点などを日本語で自由に書けるようにした。

4

アンケート調査に見るテレビ会議の効果

4.1 生徒の全体的な感想

生徒による事後アンケート内の、Q1：「4月（入学時）の自分と比較して英語で発表することに関してどのように変化しましたか」の問いに対する自由記述回答（79回答）をカテゴリ分けすると、表1の結果となった：①「英語4技能の向上の実感」と、事後の「自分の改善点への気づき」を指摘した生徒が最も多く、②「プレゼンテーションのデリバリー（提示の仕方、発表の仕方）の改善の気づき」、③人前で発表する「緊張感・抵抗感の軽減」、④「自信の増加」が同率である。また、⑤「発表内容のリサーチの大切さ」、プレゼンテーション活動の取り組みへの「積極性や余裕」を挙げた生徒も多かった。

高校入学前までは、人前である程度のまとめた内容を、英語で、かつ1人でプレゼンテーションを

行う機会は皆無であった生徒が、オーストラリアの高校生を相手にテレビ会議を通してプレゼンテーションを行うのは、大きなチャレンジであったが、英語力の向上、改善への気づき、自信や積極性などでプラスの効果が出た。

■表1：4月時点との変化

Q1 4月の自分と比較して英語で発表することに関してどのように変化しましたか。(79回答中)

18%	英語 4 技能に関する向上と改善点の気づき
15%	プレゼンテーションにおけるデリバリーへの改善の気づき
15%	緊張感・抵抗感の軽減
15%	自信の増加
13%	リサーチ(情報の正確さ・詳細)の大切さ
10%	プレゼン練習・発表に関する積極性・余裕
6%	自分の意見を表現する喜び
5%	語彙の増加
3%	ディスプレイ(ビジュアルエイド)の重要性

4.2 英語力の向上

4.2.1 書くことの向上

生徒に提出させたポートフォリオの中のスクリプトと、事後アンケートの中で書かせた英語の再現の質と量を見ると、使用した語彙や、自己紹介、トピックに関する内容など、英語で書く分量は実施前に比べ、明らかに増えている。また、生徒の独自のリサーチに基づき作成されたスクリプトは、教員やALTによる添削や、内容に関する助言を受け、より伝わりやすいものになった。口頭練習の都度、スクリプトを推敲し、書き直し、自然に発表できるよう暗記して口頭練習した。このサイクルを繰り返すことにより、英語を書く力、記述の精度は向上した。

また、生徒の事後アンケートの「4月の自分と比較して英語で発表することに関してどのように変化しましたか」という質問に対して、「スクリプトを訂正されることで、もっとうまく書きたいと思うようになった」「4月までは子供っぽい英文しか書け

なかったが、今では難しい言い回しや文法を使えるようになった」という回答があるなど、書く力はこの活動を通して向上した。

「日本の偉人・有名人」「日本・世界の先住民文化」「学校生活紹介」のスクリプトで使用される語彙は、教科書の範囲を超えている専門用語が含まれていたり、生活単語や、プレゼンテーションを行う際の定型表現もあるが、それらを繰り返し使うことで定着したことがわかる(表2・表3)。

4.2.2 音声面の能力の向上

テレビ会議を通して、音声面(聞くこと・話すこと)で生徒が気づく点も多くあった。相手はオーストラリアらしいアクセントで話すため、本校の生徒が戸惑うこともあった。例えば、can'tの音がこれまで学んできたものと違うことに気づいたり、オーストラリア独特の挨拶などを知ることでもできた。相手方の教員による、オーストラリア英語の特徴などの説明を受け、これまで学んできた英語との差異に気づき、英語にはさまざまなバリエーションがあることを知る機会になった。

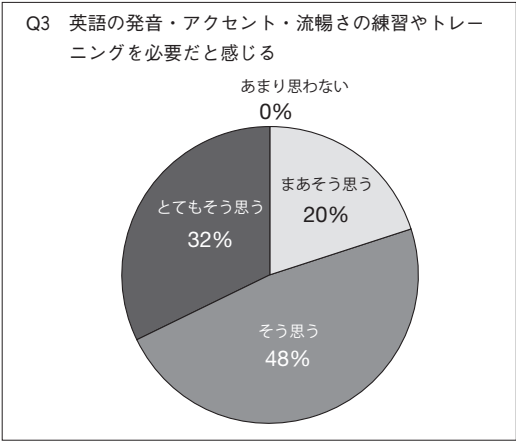
テレビ会議に使用するマイクやスピーカーの性能は良く、音響環境は良いが、先方の生徒が落ち着きに欠ける場面などがあり、はっきりゆっくり大きな声で話さなければ正確に伝わらないこともあった。生徒が気づいた改善点で顕著なのは、「自分の発音の改善」であった(表3)。生徒は、教師に添削を受けたスクリプトであっても、自分の発音が相手に伝わるものでなければならぬことを経験した。また、テレビ会議では、相手がこちらの発表を理解できないと、「わからない」という表情やしぐさをしたり、反応に困ったりするのが見えるため、伝わっていないことをすぐに認識できた。この反省を踏まえ、今年度(27年度)は、生徒の「発音を改善したい」という声に応え、「リスニング」の授業において、発音記号を学び、音読を中心とする、より実践的な発音トレーニングを導入することにした。

■表2：語彙に関する変化

語彙の増加 4回答	語彙が増えた。
	発表した分野の語彙が増えた。
	語彙力が増えた。
	英語の語彙数が増え、言い回しや使える表現の数が増えた。

■ 表 3：プレゼンテーションの英語に関する改善点

改善点への 気づき 14回答	英語全般	自分の英語が伝わりにくい英語だということに気づいた。
	英語全般	英語を使える力がついた。
	応答	発表後の質問などにその場ですぐに応答できるようになった。
	構成	スピーチスクリプトの構造を考えるようになり、結論の部分でうまくまとめる方法を考えるようになった。
	構成	4月段階では、「読む」ので精一杯だったが、今は「説明」するプレゼンができるようになった。
	構成	事前にプレゼン向けに内容をまとめるようになった。
	構成	筋道立ててわかりやすいプレゼンをしたいと思うようになった。
	発音	ALTやオーストラリアの生徒の発音と自分の発音がずいぶん違って、思い込み自己流でやっていたと気づいた。
	発音	伝わりやすくするため、発音は大事だと感じた。
	発音	アクセントや発音がしっかりしていないと伝わらないと気づいた。
	発音	英語の発音をもっと上手にしなければと思った。
	発音	発表するため、相手に伝わる発音やアクセントに気を配るようになった。
	表現	スクリプトを訂正されて、もっとうまくなろうと思うようになった。
	表現	4月までは子供っぽい英文しかかけなかったが、今では難しい言い回しや文法を使えるようになった。



▶ 図 1：音声面（発音）の改善の必要性

4.3 日本文化の発信・相手の文化の気づき

テレビ会議開始前の事前アンケートによれば、「オーストラリアについてよく知らない」と答えた生徒が40%とやや多かった。一方で、オーストラリアの文化についての興味関心や好奇心は高く87.5%であった。事後アンケートでは、オーストラリアについて「知っている」と答えた生徒は65%に上り、テレビ会議を通じたやり取りが異文化（オーストラリア）への関心と理解につながっていることがわかる（表4・5）。また、オーストラリアの生徒と「交流し、文化を知りたい」「日本文化を共有したい」「文

化を学ぶのに効果的だ」の項目は総じてそれぞれ90%以上と、非常に高い結果となっていることから、本校生徒のテレビ会議への期待度は高い。事後アンケートでも、オーストラリアの生徒と話すこと、日本文化を教えることを楽しんだ生徒が90%と満足度は高かった。一方、67.5%の生徒が相手の発表を興味を持って聞いたと回答したが、この項目で「普通」「そうは思わない」の割合が若干高いのは、日本とオーストラリアの生徒の授業への参加、準備の入念さ、クラスコントロールの違いに原因があることが記述回答でわかった。例えば、本校生徒が準備するほど熱心に相手が準備しなかったり、相手のクラスが騒がしかったり、回線の不都合で音が聞こえなくなるなどの技術的なトラブルが多くあった回もあり、集中が途切れがちだったことが考えられる。

4.3.1 ノンバーバルコミュニケーションへの気づき

テレビ会議によるプレゼンテーションは、英語力の向上のみならず、異文化理解力の向上にも大きく寄与する。相手の文化の発表の内容はもちろん、教室の風景や生徒の様子、文化的な違いや共通点について理解を深めることができる。ボディランゲージや表情など、ノンバーバルなコミュニケーションの仕方の違いを体験的に学ぶことができ、生徒がテレビ会議後に本校のALTにオーストラリアの生徒がしたしぐさやジェスチャーの意味を尋ねることも

■表 4：オーストラリアについて

事前アンケート			事後アンケート
Q6	Q8		Q1
オーストラリアの文化について知っていることがある。	オーストラリアの文化をもっと知りたいと思う。		オーストラリアについて知っている。
25	2.5	とても そうは思わない	0
15	0	そう思わない	2.5
40	10	普通	32.5
20	22.5	そう思う	42.5
0	65	とてもそう思う	22.5
100	100	パーセント (%)	100

■表 5：オーストラリアと日本の文化学習に関して

事前アンケート						事後アンケート		
Q9	Q11	Q12	Q5	Q3		Q10	Q6	Q8
テレビ会議を利用して、オーストラリアの生徒と交流し文化を知りたい。	テレビ会議によって、オーストラリアの生徒たちと日本文化を共有したいと思う。	オーストラリアの文化についてもっと知りたいと思う。	テレビ会議システムはオーストラリアの生徒たちに日本の文化や日本について教えるには効果的だ。	テレビ会議はオーストラリアの生徒との交流と文化を学ぶのに効果的だ。		オーストラリアの生徒に日本文化を教えられて楽しかった。	オーストラリアの生徒と話すのは楽しかった。	テレビ会議を使った授業で、積極的に会話したり、興味を持って相手の発表を聞いた。
0	0	0	7.5	5	とても そうは思わない	0	0	0
0	0	0	0	0	そう思わない	0	0	10
10	7.5	5	2.5	0	普通	12.5	2.5	22.5
17.5	30	22.5	25	17.5	そう思う	37.5	15	50
72.5	62.5	72.5	65	77.5	とてもそう思う	50	82.5	17.5
100	100	100	100	100	パーセント (%)	100	100	100

あった。相手のジェスチャーや相づちなどについては「相手の相づちのおかげで、伝わっていることがわかるから自信になる」と述べた生徒も多かった。また、先方の日本語の教室に、日本や日本文化の写真や、日本語の表などが貼ってあり、本校生徒は日本と違い、日本語の教室に生徒が移動してくる様子がわかる。また、先生の問いかけに対して臆せず挙手をして自分の意見を述べることなど、オーストラリアの生徒が日本語の授業に積極的に参加することを、「尊敬する」と感想を述べた生徒が多かった。欧米の生徒は日本の生徒よりもより積極的に授業にかかわると教えるよりも、実際にその現場を見せることができ、より良い刺激と動機づけになっている。

4.3.2 自国文化の認識と涵養

文化面に関する本校生徒の気づきで顕著なのは、①日本の文化などは、すでに日常の身の回りに当然のように存在するので、異文化を持つ人々に詳しく伝えようとするときにかえって難しさを感じる点、②日本人同士の情報のやり取りに見られる暗黙の了解、当然の常識と情報の共有、理解がオーストラリアの生徒との交流には通用しないため、特に日本文化を説明する際にはその背景や詳細などさらなる情報が必要になり、そのための詳細なリサーチと準備が必要になる点である。テレビ会議のプレゼンテーションを通して本校生徒はこのことを強く感じたようだ。自分が当然のように知っていることを、

異文化にいるそれを全く知らない相手に伝えるには、共通の認識に頼らずに、自分が知っている以上の説明、つまりは事前リサーチが必要だということだ。中嶋（2006）が指摘するように、生徒は「日本社会の歴史や文化、日本人の美徳などについて、学び、考え、共有する努力をしなければならない」ことに気づいた。

また、想定外でよい議論になることもある。2国間の時事的な共通課題についても、生徒同士が意見を出し合うことができた。両国の野生動物について話した際、オーストラリアの生徒が本校生徒に「捕鯨についてどう思うか」と質問した。両校の教員がやや緊張した瞬間でもあったが、先方の教員が「カンガルーの肉を食べる人？」とオーストラリアの生徒に挙手をさせた後、「カンガルーもクジラも哺乳類だが、なぜクジラを獲てはいけないのか」と生徒に投げかけた。本校生徒も、「自分はクジラを食べないが、なぜ批判されてまで日本は獲り続けるのか」や、「カンガルーがよくてクジラがだめな理由は？」という疑問を持ったようだ。どちらかの結論や正しいかどうかを決めるのではなく、そのような課題が両国にはあり、それについて意見交換できたのは貴重な機会だったと感じたようだ。

4.4 情意面の効果

4.4.1 自信・動機づけの向上と抵抗感の軽減

テレビ会議システム使用開始前に実施したアン

ケートでは、90%の生徒が「テレビ会議システムの効果への期待を持っている」。また、95%の生徒が、テレビ会議を通して英語を上達させたいという希望を持っている。しかしながら、テレビ会議実施前「英語圏の人と英語で話すことに自信がある」と答えた生徒はわずか7.5%であり、60%の生徒が「自信がない」と答えている（表6）。

テレビ会議実施後、英語圏の人と英語で話すことに「自信がある」と答えた生徒は60%に上ったのは顕著なテレビ会議の効果である。また、テレビ会議により「英語力が上がった」と実感している生徒は75%、「これからもっと相手校の生徒と英語を話すために英語の勉強を頑張る」と答えた生徒は92.5%に上った。テレビ会議によるプレゼンテーションが英語力を向上させ、その経験がさらに力を伸ばそうとする動機づけになっていると言える。

生徒の事後アンケートの自由記述回答を見ると、4月に比べ「自信の増加」「緊張感・抵抗感の低減」に顕著な違いが出ている。英語で多くの英語ネイティブの生徒に対して1人でプレゼンテーションをすることに抵抗がなくなり、「自信がついた」と明言できる生徒も多くなった（表6・7・8）。

英語の語彙が増えたこと、自分の言葉を使い、英文で考えやリサーチしたことを表現できるようになったことを自信の理由として挙げる生徒も目立った（表9）。従来の教科書の英文の暗唱や、教科書内にある、自分の考えでない英語を学ぶことから、自分の言葉で内容について表現し、テレビ会議

■ 表 6：英語力と自信についての事件事後比較

事前アンケート				事後アンケート		
Q3	Q17	Q16		Q13	Q14	Q2
テレビ会議はオーストラリアの生徒との交流と文化を学ぶのに効果的だ。	オーストラリアのとのテレビ会議で英語を上達させたいと思う。	英語圏の人と英語で話すことに自信がある。		英語圏の人と英語で話すことに自信がある。	オーストラリアとのテレビ会議システムを使った授業で英語力が上がったと思う。	テレビ会議システムを使って授業でオーストラリアの生徒と英語をもっと話すために、英語の勉強を頑張る。
5	0	25	とても そうは思わない	0	0	0
0	0	35	そう思わない	15	5	0
0	5	22.5	普通	25	20	7.5
17.5	17.5	10	そう思う	42.5	50	40
77.5	77.5	7.5	とてもそう思う	17.5	25	52.5
100	100	100	パーセント (%)	100	100	100

を通して伝える相手がいること、そして、相手の反応から、自分の英語や発表を振り返る機会が多くなったことが、自信と今後の課題への動機付けにつながっていると思われる（表9）。

■表7：自信の増加に関する自由記述回答

自信の増加 12回答	人前で発表することに戸惑っていたが、練習を繰り返すたびに自信がついた。
	4月の入学時に比べ発表できる力がついた。
	4月より声も大きくなり、笑顔も出るようになった。
	自分の英語に自信を持って発表できるようになった。
	あまり緊張しなくなった。自信がついた。
	4月段階では、人前で発表するなど考えられなかったが、なれて自信がついた。
	プレゼンに関して勇気がついた。
	恥ずかしい気持ちが無くなった。
	少しずつ英語で発表することに自信がついた。
	同級生、上級生、オーストラリアの生徒など多くの人の前で発表できて自信がついた。
	4月よりは自信がついた。
	英語で発表することができるようになった気がする。

■表8：自信・緊張感・抵抗感の低減に関する自由記述回答

自信・緊張感・抵抗感の低減 12回答	以前より自信がついた。人前で英語を使う抵抗感がなくなった。
	人前で発表できるようになった。
	自信を持って発表できるようになった。
	人前で話すことに緊張をしなくなった。
	緊張を乗り越えられるようになった。
	人前で発表することになれ、苦手じゃなくなった。
	人前で発表するのが苦手じゃなくなった。
	発表に抵抗感がなくなった。
	英語で人前で話すことに抵抗感がなくなった。
	4月は発表することに大きな抵抗を感じていたが今はない。
	4月は英語で発表するなど考えられなかったが、今は抵抗感がなくなった。
	緊張感が減った。

■表9：心理面の効果 英文作成に関する自由記述回答

心理面の効果 オリジナル英文作成ができる 5回答	教科書の英文を暗唱して発表することはあったが、自分で作った文を自分の物にして発表するのは新鮮だった。
	4月までは教科書で習ったことしかできなかったが、今は自分で思っていることを表現するようになったのは成長。
	4月のころは簡単な英文しか言えなかったが、今はある程度文で話せるようになった。
	自分の意見を上手に表現し、伝えられるようになった。
	自分で作った文章だったので、自分の言葉で伝えられた実感がする。

4.4.2 テレビ会議を「楽しい」と思える要因

テレビ会議は今年度15回行ったが、そのための授業外の準備や課題の多さを考えると、生徒と教員にとっては決して楽な作業ではない。しかし、87.5%の生徒が「オーストラリアの生徒に日本文化を教えられて楽しかった」と回答し、97.5%の生徒が「オーストラリアの生徒と話すのは楽しかった」と答えた（表5「とてもそう思う」「そう思う」の合計）。決して、「難しく面倒で手間がかかる」ではなく、海外とじかにつながることを純粋に楽しんでいることがわかった。「楽しかった」（表5、Q6）の理由を自由記述で回答させたところ、表10のようになった。「異文化への関心が高まった」が最も多いが、同世代のなじみやすさ、同世代共通の話題、視覚面の伝わりやすさ、即時的な会話のやり取り、オーストラリアの生徒の明るさ、気さくさや積極的なコミュニケーションの取り方などが影響している。坂本（2013）は、「子どもたちは異質の中に自分と同じものを発見することに強い関心を寄せ」、映像による交流に関しては、「リアルタイムの交流だけが持つ臨場感」が存在し、「映像によるリアルタイム交流の意義に気づく」効果を挙げている。テレビ会議だからできる工夫、ビジュアルエイドやジェスチャーなどを通して「伝わった」という経験がテレビ会議を楽しくさせている。文化が違って、同世代こそその共通の話題があり、英語によるリアルタイムのコミュニケーションを通して、文化を越えて共有できる喜びが、テレビ会議成功のカギになっていると言える。

■ 表10：各カテゴリごとの感想の自由記述回答

カテゴリ	数	自由記述意見
異文化理解	9	オーストラリアの文化（食文化・日本の印象）を学ぶことや意見交換ができてよかった。
	4	オーストラリアの事情や様子、スラングが手に取るようにわかったから。
貴重な機会	2	普通の生活で外国人と話すことがあまり多くないので、全体的に楽しかったです。
共通の話題・同年代の相手	3	オーストラリアの学校や授業の様子がわかり興味深かった。
	1	同じくらいの年齢のオーストラリアの生徒から日本文化について質問を受けたこと。
	1	俳優や歌手など好きなことが共通していたので、話が弾んでよかった。
コミュニケーションの工夫	1	言葉が通じにくいときでも、ジェスチャーで伝わったり、自分の言いたいことが伝わるんだという実感。
	1	相手に伝わるように言葉を工夫したり、伝え方を工夫したりしながら話をしたこと。
	1	こちらは完璧な英語ではなかったけれど、相づちしてくれて、ジェスチャーも見えるので伝わりやすさを感じた。
	1	相手の言っていることが少しずつわかるようになったから。
	1	授業の中で現地の生徒と英語や日本語でやり取りができたこと。
コミュニケーションを取れる喜び	6	自分の英語が通じたとき、本場の英語が理解できたときうれしかった。
	1	現地の生徒の日本語のお手伝いができてよかった。
	1	簡単な劇をやって見せてくれたり、日本の有名人を紹介できたときがうれしかった。
	2	機材トラブルなどもあるが、文化交流ができ、新しい考え方とか、予想外の応答などもあり面白かった。
思考・価値観・意見	2	オーストラリアの生徒が明るくて、たくさん発言をしていて、尊敬する。
	2	オーストラリアの積極的な生徒は個性的でよかった。会話をしているこちらとしてもとても楽しい。
	1	日本は捕鯨で批判されるが、オーストラリアではカンガルーを食べても批判されないのはなぜか。
リアルタイム即興性・反応表情がわかる	4	年が近い生徒とリアルタイムで話せて楽しいと思った。
	1	知りたいことがすぐ聞けて、すぐに答えが返ってくるから。
	1	自分の英語がどれだけ通じるか、リアルタイムでわかるところがよい。
	1	手紙やメールなどではなくて、リアルタイムで会話できるのがよかった。
	1	直接顔を見ることができたことがよい。
	1	こちらの様子を見て、相手が反応をすぐに返してくるところが非常によかった。

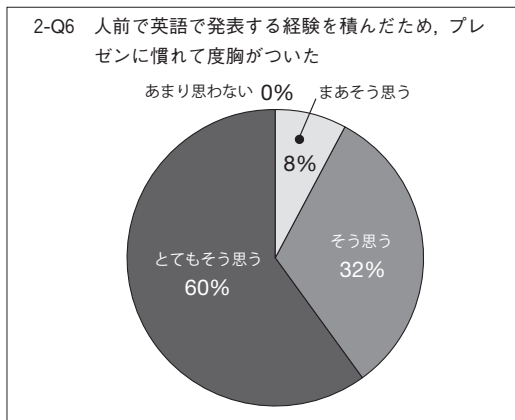
4.4.3 生徒の情意面の変化

テレビ会議終了後、テレビ会議に関する生徒の自由記述による感想を心理面の変化の観点で集約した(表11)。「楽しい」と感じる他、「堂々と伝えようとする気持ちになった」「考えながら発表するようになった」「率先して発表したり、発言することが大切だ」と回答するなど、生徒の内面に余裕と相手に触発された積極性が感じられる。オーストラリアの生徒の発表やクラスの友人の発表を楽しむゆとりや、まとまった内容を英語でやり取りすることを楽しめる余裕が出てきた。プレゼンテーションの個人練習、教員やALTの補助、リハーサル、テレビ会議本番、評価プレゼンテーションなど人前で行う機会

が多く設定されていたことも、回数をこなすことでプレゼンテーションに慣れ、「度胸がついた」という実感になっているようだ(図2)。白井(2008)によると、外国語のアウトプットを高めるためには、「リハーサル」が重要であり、「リハーサルをするには頭の中で文を組み立てるレベルまでもっていかなければならないので、インプットを聞くときの集中度も、言語処理の能力も高まる」と指摘している。このリハーサルの回数が生徒の言語処理能力を高め、それがゆとりや余裕、快適さにつながっていると思われる。

■ 表11：心理面の向上 積極性やゆとりについて 自由記述回答

心理面の向上 積極性・ゆとり 楽しさ 8回答	積極性	以前は苦手だったプレゼンが、堂々とはっきりと人に伝えようとする気持ちに変わった。
	積極性	自分の性格がより積極的になった。
	積極性	自分で作った英文を発表するのは初めてだったので新鮮だった。
	積極性	TV会議や発表の練習が楽しいと思えた。
	ゆとり	自分の発表だけではなく、友人の発表を楽しめる余裕ができた。
	ゆとり	考えながら発表する余裕ができた。
	ゆとり	自分から率先して発表することや発言することが大事だと思っている。
	楽しさ	プレゼンで相手に伝えることが楽しいと感じる。

▶ 図2：人前で英語でプレゼンテーションをする
ことに関して

なった。いずれも、「楽しかった」「自信がついた」と回答しつつも、自分のプレゼンテーションがまだ十分だと思っておらず、さらに改善して行こうとする前向きな姿勢が見られる。特に、英語を話すこと・発音の上達を挙げ、英語以外の部分では、異文化間の違いを考慮したデリバリー、伝わりやすい内容を含んだスクリプトの構成、ビジュアルエイドの工夫、積極的に話す姿勢などを挙げた。通常の授業では、多数の英語ネイティブスピーカーや、異文化を持つ聞き手を対象にプレゼンテーションを行う機会は限られており、発音のトレーニングの必要性や、異文化を持つ相手にも伝わりやすいデリバリーについて考え、改善を実行する機会は少ない。言い換えればテレビ会議は、生徒の気づきの機会という大きな利点と可能性を持っていると言える。

4.4.4 異文化間プレゼンテーションへの コツの気づき

中間調査および事後調査で、今後の異文化間プレゼンテーション力向上のための改善点を1人3つまで自由記述回答で挙げさせた。結果をまとめると、前出の表3となったが、中間調査では表12の結果と

4.5 わかりやすく伝える工夫

4.5.1 リサーチの重要性

テレビ会議のプレゼンテーションのトピックは、生徒一人一人で異なるため、プレゼンテーションの

■ 表12：中間アンケート テレビ会議を行って気づいたこと 自由記述回答回答数132（複数回答可）

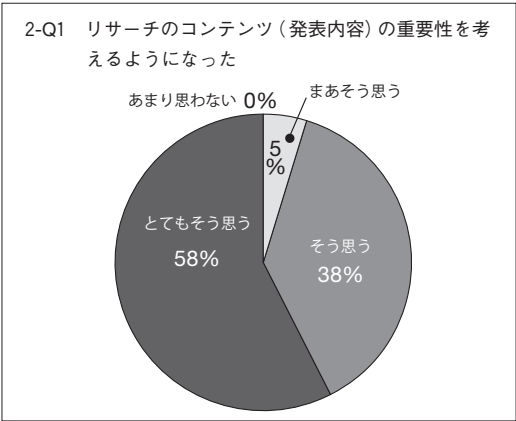
中間Q4	オーストラリアの生徒とのテレビ会議で気づいたこと、今後の改善点（10月時点）
18.9%	こちらが正しく、伝わる発音をするように練習する必要
13.6%	相手の文化を知る・こちらの文化を伝える必要
12.9%	オーストラリアの英語・生の英語が聞ける利点
10.6%	自分の発表に対する相手の反応がわかる即時性
9.1%	伝わるプレゼンのためのこちら側の準備の必要
9.1%	デリバリー（目線・声・提示の仕方）の工夫が必要なこと
9.1%	聞き手にとって面白みのある内容を用意
6.1%	相手への反応など双方向のコミュニケーションがある
4.5%	自分の意見を積極的に表現・発言する
3.0%	文化の違いを考慮した発表の準備
3.0%	ビジュアルエイドなど補助を効果的に使う

英文原稿を作成する前に、それぞれにリサーチをさせた。「日本の偉人・有名人」「日本・世界の先住民文化」「学校生活紹介」のテーマのうち、特に「日本の偉人・有名人」は知らない日本人が当たる可能性も高い。また、先住民族に関しては、「アイヌの衣食住、宗教、歴史的な地位、保護政策、神話、言語」の8つのトピックに分け、生徒1人につき1つのトピックについてリサーチし、スクリプトとスライドを作成した。アイヌについてよく知らない相手に、その価値観や歴史を説明するために、情報の出典を明らかにし、数値データを盛り込ませるなど、プレゼンテーションに説得力を持たせる工夫を指導した。本校生徒は入念なリサーチで得た専門的な情報を、自分が発表しやすいシンプルな英語表現を使用して伝えるコツに気づいたようだ（表13・図3）。

■ 表13：リサーチの重要性について 自由記述回答

リサーチの重要性に気づいた10回答	リサーチがとても大事だということに気づいた。
	ただ調べるだけでなく、正しい情報を集めようとするようになった。
	リサーチの大切さがわかった。内容が大事だと思った。
	発表の内容のために、社会的なことを考えるようになった。
	発表のテーマについて納得いく情報を探す習慣がついた。
	リサーチするだけでなく、正確な情報を調べわかりやすく発表をするようになった。
	リサーチは大事だと思った。
	発表について調査やまとめの作業が大事だと気づいた。
	リサーチで内容を理解してまとめ、人前で発表する力がついた。
	リサーチの重要性。

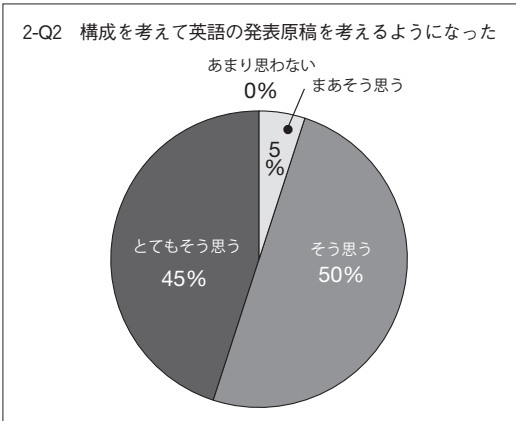
事後調査ではほぼ全員の生徒がリサーチの重要性を認識した。高橋（1999）が指摘するように、「テレビ会議の継続は、単に英語学習力を培うばかりではなく、（中略）自主学習能力のひとつである情報蒐集能力、検索能力を伸ばすことができる重要な意味を持って」おり、相手に対し「理解できる適切なものを提供する必要がある」ことは確かである。



▶ 図3：リサーチのコンテンツの重要性について

4.5.2 構成の工夫

英語によるプレゼンテーションの構成を工夫するコツを得た生徒が多かった（図4）。影戸（2007）が提案するように、まず「聞き手の分析、プレゼンテーションの目的」による構成から始め、聞き手へのクイズ、スキットなど「インタラクションのしかけ」を工夫し、相手の注目を途切れさせないコツを指導した。また、聞き手にまずプレゼンテーションの全体像を理解してもらい、それから詳細を述べていく構成にすることなど、本校の生徒がまだつたない英語で説明する弱点を構成面でカバーし、より効果的に相手に伝える工夫をさせた。「導入で興味を持ってもらい、ボディで詳細を述べ、結論でまとめる」、「型」を示してからプレゼンテーションを構成させ、生徒が負担なく取り掛かれるようにした。



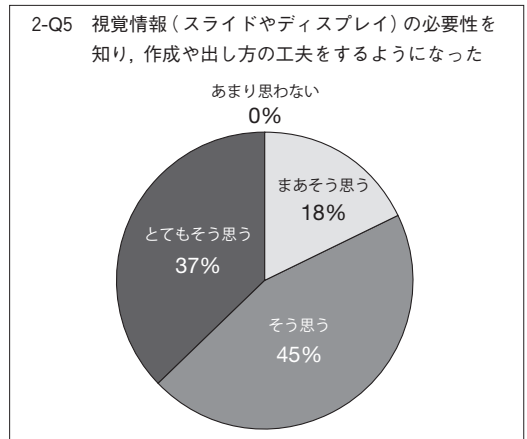
▶ 図4：プレゼンテーションの構成について

4.5.3 ビジュアルエイドの活用

英語力、異文化理解力、英語プレゼンテーション力の他に副産物として身につけたのは、より詳しく正確に伝えるためのビジュアルエイドの作成技術である。これについては、プレゼンテーションの準備段階で、説明の英文とともに準備させた。口頭で言うべき内容と見せるべき内容を分けて考えさせた。事後アンケートでは、「数値など伝えにくい情報や、図にした方が一目瞭然な内容は見せる方が効果的だとわかった」というコメントが出るほど、ビジュアルエイドがプレゼンテーションを補強することを実感したようだ。

「日本の有名人」のプレゼンテーションでは、画用紙や模造紙に写真や説明を貼るポスタープレゼンテーションの形をとった。これは、高校入学時段階での生徒のPCスキルが高くなかったためである。事前アンケートのパワーポイントの使用に関する質問では、約半数の生徒が「自信がない」と答えた。次の「先住民」のテーマでは、全員にパワーポイントを用いて英語でプレゼンテーションをさせた。テーマは一人一人違ったが、グループ活動により互いに助け合い、全員パワーポイントによる英語プレゼンテーションを行うことができた。その結果、パワーポイントに自信がない生徒は47.5%から15%まで減少し、自信がある生徒は40%から62.5%まで増加した(表14)。また、生徒は、大量の難解な情報、英語で伝えにくいことは「見せた方がよい」と考えるようになり、ビジュアルエイドの効果を実感した(図5)。奥崎(2010)が、プレゼンテーションの伝

わりやすさについて、例えば、発音に難がある学生でも、「プレゼンテーションを構成するほかの3つの要素(構成面、視覚面、身体面)で補う工夫を施すよう指導することによって、発音のわかり難さを補完するプレゼンテーションを導くことができる」と指摘したのは、英語プレゼンテーションの指導に関して多くの示唆を含んでいる。



▶ 図5：視覚情報の必要性と出し方の工夫

4.5.4 デリバリーの工夫

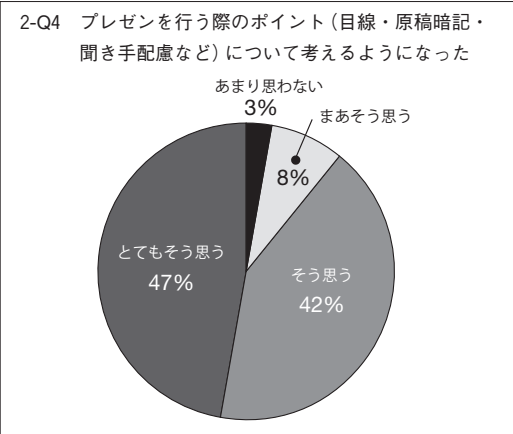
異文化を持つ聞き手だからこそ、うまく伝える伝え方を工夫する必要があると考えられるようになった。教員の問いに対して授業内にうつむきがちに小声で答える生徒も多いが、プレゼンテーションの場合はそれでは全く通じない。相手がいるコミュニケーションでは、内容を伝えるためにアイコンタクト、声の調子、表情、ジェスチャーなどを工夫することが大切だと実施後に答えた生徒が多かった(表15・図6)。それを実現するためには、手元の原稿を棒読みするのではなく、極力暗記し、顔を上げアイコンタクトをとり、時折笑顔でハキハキと話すなど多くの点に留意する必要があるとわかったようだ。この点については、影戸(2007)が国際交流活動の実践報告で、発表原稿や相手への促しが棒読みだったため、相手の「反応を引き出し、次に展開することができなかった」と、テレビ会議におけるインタラクションの失敗例を指摘している。

■ 表14：パワーポイントの使用について

事前		事後
Q18		Q18
パワーポイントなどを使ってスライドを作成したり、発表することに自信がある。		パワーポイントなどを使ってスライドを作成したり、発表することに自信がある。
15	とても そうは思わない	2.5
32.5	そう思わない	12.5
12.5	普通	22.5
27.5	そう思う	35
12.5	とてもそう思う	27.5
100	パーセント(%)	100

■ 表 15：デリバリーの改善への気づき 自由記述回答

デリバリーの改善への気づき 12回答	人の発表を聞いて、自分の発表を改善できるようになった（ポイントがわかった）。
	相手を見ていない、原稿を覚えていないなど反省点はあるが、それに気づくことができた。
	プレゼンで伝えるときは、目線、声の調子、表情など注意すべき点がたくさんあるのだとわかった。
	発表の際の声が大きくなり、わかりやすさを心がけるようになった。
	それまではうつむきがちだったが、目線を上げて発表できるようになった。
	人の目を見て話し、聞き手とコミュニケーションを取れるようになった。
	自分の表情が大事だとわかった。
	聞き手に伝えようという意識がついた。
	相手を意識したプレゼンをするようになった。
	相手に伝えるということを意識するようになった。
	テレビ会議も、クラスメートの前でも緊張はするが、相手を見て笑顔で話すようになった。
	異文化に対する知識が増えて、発表の仕方にも伝わりやすい工夫をするようになった。



▶ 図 6：プレゼンテーションのデリバリーについて

5 結論・考察・課題

5.1 結論

オーストラリアの高校生との異文化間プレゼン

テーションによるテレビ会議の効果としては：①生徒の英語力（特に、書くこと、聞くこと・話すこと）の向上、②ノンバーバルコミュニケーションの気づきと改善の工夫、③ 自国文化および他国文化への気づきと理解、④ 異文化を持つ相手に英語でプレゼンテーションを行う心理的障壁や恐れ軽減、自信の向上、改善への動機づけの強化、⑤ より良い異文化間コミュニケーションのための「デリバリー（アイコンタクト、リサーチ、構成、ビジュアルエイドなど）」の気づきと工夫、⑥ プレゼンテーションソフトの使用に関する自信、が挙げられる。テレビ会議による交流により、本校生徒が、同世代で異文化を持つ相手とのやり取りと、お互いの文化を伝え合うことに喜びを感じ、プレゼンテーションを、「やらされている感」がなく、それを通して心から異文化交流を楽しんでいる様子が、授業内の実践中のみならず、記述アンケートからも見られた。

5.2 考察

テレビ会議を通じた異文化間コミュニケーション力の向上に関して、一定の研究実践の成果は現れたが、テレビ会議システム導入2年目ということや、母集団の少ない実践のため、どれだけ広い汎用性があるかはまだ不明である。しかしながら、技術革新が進み、同様の国際協同学習プログラムが増え、低コストかつ、オーセンティックな体験が可能な環境になれば、今後テレビ会議システムの学校現場への導入は増えていくだろう。特に、近年のわが国のグローバル人材育成、海外への日本語教育の普及の政策や、オーストラリアに代表されるような周辺諸国の、日本語や文化に関する教育ニーズの向上などの機会、さらには新しい教育の動きである、協同学習、課題解決型学習、アクティブラーニング、ブレンDEDラーニングを支える役割として、テレビ会議の活用幅はより広がっていくものと確信する。

5.3 課題 1：対象人数の改善

今回は40人クラス対相手20人のテレビ会議であったが、各トピック必ず1人1回プレゼンテーションをしても、毎回見ているだけの生徒が出てくるのは避けられない。本校初の導入であったので、テレビ会議がどんなものを理解するために全員参加としたが、清水（2004）の指摘した問題点と同様、「学習者一人一人の発話機会の保障」を図るべく、平成

27年度は、5人のグループを8つ作り、テレビ会議のたびに5人ずつ50分間プレゼンテーションやディスカッション、意見交換を行うことにした。

5.4 課題 2：個別のやり取りへの発展

「オーストラリアに友人が欲しい」という希望が多かった事前アンケートに対し、事後アンケートで「オーストラリアの友人がいる」の回答が少なかったのは、個別の交流の機会が少なかったことが原因である。そこで、テレビ会議で生徒同士がある程度親しくなったら、本校生徒に個別課題としての「異文化理解レポート」をさせたいと考えている。例えば、それぞれの生徒が、日豪の文化の違いについてテーマを1つ決め、本校生徒が相手生徒にインタビューや、協同でリサーチをしたり、研究して発表するなど、メールやスカイプ、SNSなどで生徒が個別にやり取りを行う、個人レベルの交流のチャンネルができれば、より密な交流が可能になるのではないか。

5.5 課題 3：国際協同プロジェクトへの発展

今年度（27年度）も同じオーストラリアの相手校と15回テレビ会議を行う予定である。今年度は、ある共通のトピックに関して共同プロジェクトを進め、アートやビデオ、スライドショーを製作したり、テレビ会議で英語と日本語を使い生徒がイベントを行ったり、テレビ会議の交流に加え、郵便でカードや贈り物の交換、可能であれば将来的な相互訪問に発展させる下地をつくるなど、継続してこのテレビ会議システムのよりよい活用に関するノウハウを蓄積していきたいと考えている。

5.6 まとめ：実施・運営上の課題と問題点

ICT教育で避けられないのは、機材のトラブルや通信の不具合である。テレビ会議システムでは、音声や映像が安定しなかったり、パワーポイントで作成したスライドを、本来はこのシステムを介して相手に見せることができるシステムになっているが、うまく見せられず、結局メールであらかじめ送っておき、相手校の教員に映し出してもらったりした。また、前日に接続テストをして万全な準備で臨んでも、当日生徒を前にして、インターネットの回線の

不具合でテレビ会議そのものが不可能になり、電話でキャンセルをしたこともあった。

学校内、英語科内の協力体制作りも大切である。導入、リース契約、機材の設置など設備面や事務処理に関しては管理職や事務室のスタッフとの連絡が必要となる。さらに、校内の協力体制作りは不可欠である。このシステムを運用するには、相手校との日時の調整が必要であるが、時差もあり、相手校の時間割とこちらの授業の時間割は一致することが少ないため、該当科目の時間割変更を毎回行わなければならない。教務の時間割担当や同じ英語科のスタッフの理解と協力を仰ぎ、時間割変更や使用教室の手配などの調整は必要になってくる。また、英語科スタッフやより多くの教員がこのテレビ会議システムの使用に慣れることで、効率の良い活用や他学科、他クラス、他教科と連携した使用も可能になってくるであろう。例えば、地理や歴史、生物などの分野で、オーストラリアについて学ぶ機会も可能になってくる。このシステムの使用がより気軽に、負担のない形で可能になればさらに活用の幅が広がってくると思われる。

謝 辞

今回初めて英検研究助成をいただき、決定から約1年、非常に濃密で実りの多い研究実践をさせていただきました。おかげさまで、テレビ会議システム導入から3年目に見合う実践と研究・検証とその後の課題を得ることができました。このような機会を与えてくださいました、公益財団法人日本英語検定協会関係者の皆様、ならびに選考委員の先生に心からのお礼を申し上げます。とりわけ、私の研究の指導担当していただいた小池生夫先生には、初めから終わりまで、激励、ご指導とご助言を賜り深く感謝申し上げます。また、北海道千歳高等学校の学校長をはじめ、本校教職員、共同研究にご尽力くださった英語科教員、生徒の理解と協力なしではこの実践研究は実現できませんでした。厚くお礼申し上げます。テレビ会議の導入と実践・研究を長く続けておられる、富山高等専門学校教授の清水義彦先生には、テレビ会議システムの視察訪問をさせていただいた際に、大変丁寧で親身なご指導、ご助言を賜りました。またテレビ会議システムを通して、ご協力くださったオーストラリア、University of New EnglandのDr. Auh Myung-Sook、ならびにGlen Innes High

School のMercurius Goldstein 先生には、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

〈共同研究者〉

北海道千歳高等学校英語科教員一同

参考文献 (*は引用文献)

- 新井和広・板倉杏介.(2013).『グループ学習入門：アカデミック・スキルズ 学びあう場づくりの技法』. 東京：慶応義塾大学出版会.
- * Auh, M.S., & Walker, R. (2013). Creative connections with Asia using videoconferencing. *Journal for Educators, Teachers and Trainers*, 5(1), 31-44, University of Granada.
- * Broukal, M. (2011). *What A World Reading: Amazing Stories from Around the Globe*. Tokyo: Pearson Japan.
- Field, M., Sheppard, C., & Fegan, J. (2002). A Preliminary Evaluation of a Video-Conference Exchange. *Bulletin of the Institute of Language Teaching, Waseda University*, 57, 57-81.
- * Henry, K., Drysdale, P., Livingstone, C., Denton, J. W.H., de Brouwer, G., Gruen, D., & Smith, H. (2012). *Australia in the Asian Century White Paper*, Canberra: The Commonwealth of Australia.
- * 廣瀬孝文.(2006).「教育実践レポート テレビ会議を利用した国際遠隔授業の試みーカナダの大学との連携授業の実践と自己評価ー」. 岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編, 45, 43-59.
- * 影戸誠.(2007).「国際交流場面でのメディア活用と英語プレゼンテーション」. 教育メディア研究, 14(1), 81-95.
- * 影戸誠・渡辺浩行.(2003).『実践プレゼンテーションー日本語・英語で挑戦』. 東京：日本文教出版.
- 影浦攻(編著).(1999).『楽しい英語活動と国際交流活動』. 東京：啓林館.
- * 川口義一.(2005).「テレビ会議を用いた語学教育のあり方」. 平成15・16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書.
- 小池生夫(編著).(2013).『提言 日本の英語教育 ガラパゴスからの脱出』. 東京：光村図書出版.
- 小松祐子・高橋希実.(2012).「テレビ会議による交流型フランス語授業の試み：行動中心主義にもとづく協同学習の実践として」. *Rencontres*, (26), 63-67.
- 松田奏保・石川希美・小野真嗣.(2008).「TV会議システムを用いたニュージーランドとの遠隔授業実施報告」. 苫小牧工業高等専門学校紀要(43), 39-53.
- 三上晃・西堀ゆり・中野美知子(編集).(2011). 大学英語教育学会監修 英語教育学大系第12巻『英語教育におけるメディア利用 CALL から NBLT まで』. 東京：大修館書店.
- 三宅茜巳・北川邦夫・谷口知司・山中マージェット・橋詰恵雄・古池嘉和・久代美和子・山田悦司・吉村和昌他.(2003).『「学力」という視点から見たテレビ会議システムを用いた高大連携授業ーマルチメディアを用いた英語教育・異文化コミュニケーション教育の実践例』. 岐阜女子大学文化情報研究, 5(2),

- 30-33.
- 溝上慎一.(2014).『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』. 東京：東信堂.
- 文部科学省.(2010).『教育の情報化に関する手引』. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm(2014年10月1日閲覧)
- * 文部科学省.(2014).『ICTを活用した教育の推進に関する懇談会報告書』. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afidfile/2014/09/01/1351684_01_1.pdf(2014年10月1日閲覧)
- 森山真吾.(2005).「テレビ会議システムを使った授業における、学習者アイデンティティと言語活動の新たな理解」. 中央大学国際英語学部紀要, 6, 1-9.
- * 永田成文.(2011).「ESDの視点を導入した小学校における異文化理解学習：遠隔会議による国際交流を活用して」. 三重大学国際交流センター紀要, 6, 97-110.
- 中村耕二.(2007).『グローバル時代の英語教育：Content-based Process Writing for Oral Presentation』. 東京：英宝社.
- 中野渉・石川希美・松田奏保・小野真嗣.(2008).「苫小牧高専における国際化推進プログラムについて」. *Journal of JSEE*, 56(5), 31-35.
- * 中瀧康二.(2006).「遠隔技術を利用した国際連携授業」. メディア教育研究, 3(1), 43-54.
- * 成瀬喜則・長山昌子.(2006).「ICTを活用した国際交流学習の効果を高めるための取り組み」. 教育情報研究：日本教育情報学会学会誌, 22(2), 19-27.
- * 西堀ゆり.(2002).「グローバル・コミュニケーション時代の英語教授法：遠隔協調学習の導入を目指して」. *Hokkaido JACET journal*, (1), 65-75.
- * 奥崎真理子.(2010).「総合評価を上げる特別研究英語プレゼンテーションの考察(1)」. 函館工業高等専門学校紀要, 44, 43-48.
- * 奥崎真理子・森谷健二・小山慎哉・工藤雅嗣・木村司.(2011).「総合評価を上げる特別研究英語プレゼンテーションの考察(2)」. 函館工業高等専門学校紀要, 45, 55-58.
- 大下邦幸(監修).(2014).『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』. 東京：東京書籍.
- * 坂本旬.(2013).「異文化間コミュニケーションを中心としたメディア情報リテラシー教育の創造」. 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 10, 157-175.
- Sheppard, C., & Kawaguchi, Y. (2005). Field, M.H., Fegan, J. (Eds.). Task performance, language learning and Videoconferencing: An experiment in cross-border collaboration. *Education across Borders: philosophy, policy, pedagogy, new paradigms and challenges*, 237.

- * 清水和久.(2011).「国際交流を題材とした初年次教育の試み—初等教育の成果をふまえた高等教育における取り組み」. コンピュータ&エデュケーション, 30, 36-41.
- 清水和久・益子典文.(2009).「小学校における『自律型国際交流学習』の特徴とそのデザイン：国際交流学習の実践事例の類型化に基づく特徴の明確化」. 岐阜大学カリキュラム開発研究, 27(1), 90-99.
- * 清水義彦.(2004).「学生の英語運用能力の伸長におけるテレビ会議システムの有効性に関する研究」. 第33回全日本教育工学研究協議会全国大会研究発表論文集, F101-07.
- * 清水義彦.(2010).「英語コミュニケーション能力育成を意識した学習環境に関する考察」. 富山高等専門学校紀要, (1), 117-120.
- * 清水義彦.(2015).「若者の国際競争力を高めるアプローチ」. 富山高等専門学校紀要, (2), 21-26.
- * 清水義彦・宮地功.(2009).「2B2-B1 英語教育において個別テレビ会議交流による会話能力を育てる授業実践(e ラーニングからブレンディッドラーニングへ, 自主企画課題, 次世代の科学力を育てる)」. 一般社団法人日本科学教育学会年会論文集, 33, 193-194.
- * 白井恭弘.(2008).『外国語学習の科学：第二言語習得論とは何か』. 東京：岩波書店.
- * 高橋常平.(1999).「テレビ会議を利用した英語指導」. 新潟経営大学紀要, 5, 133-153.
- * 與儀峰奈子.(2009).「ICT 遠隔交流を通じた国際理解」. 琉球大学教育学部紀要, 74, 69-87.